

# 夢の話 (その二)

ひげフレディー

何十年も前に閉鎖された病院らしき建物。

その中は薄暗く、薬品とカビの匂いが混ざったような重く湿った空気が充満していた。僕がそこにいる理由はわからない。

診察室らしき部屋に入ると男が一人、虚ろな目で現代舞踏のような動きをしていた。

彼には僕の姿が見えていないようだった。

そして隣の部屋にも男が立っていた。

さっきの男同様ゾンビのような風体だが、

メドゥーサに睨まれて石にされてしまったかのように、恐怖の表情のまま固まっていた。

しかし、よく見ると彼の全身は微かに振動していた。

まるで古いビデオテープを一時停止させた時のように。

そして次の部屋にも一人、その次の部屋にも一人、

生きているのか死んでいるのかわからない男たちが、それぞれに個性的な動きを披露してくれた。

やがて院長室らしき部屋に辿り着いた。

ドアを開けると、完全にミイラ化した白衣の男が椅子に座っていた。

そしてその横の応接ソファーには青年が二人。

彼らは肩を寄せ合って毛布にくるまり

「仕送りが少なかったんだ 仕方なかったんだ」

と震えながら泣いていた。

次の瞬間、

僕はガランとした校庭の真ん中に立っていた。

斜め前には三十代半ばの女性が一人。

彼女は太極拳のような動きをし、僕の横に並ぶ数組の男女が彼女の動きを真似ていた。突然女が何か叫んだ。

すると僕の横にいた男女が後ずさりを始めた。

まるで後ろ向きに走るバイクに乗ったタンデムのカップルのように。

そして彼らは校庭の端のフェンスを猛スピードで突き破って消えた。

満足そうな顔でそれを見送った女は

「さあ 次はお前だ」

と言わんばかりに僕を指さした。

「えっ！ 僕ですか？」

予想外の展開にオドオドしていると、突然目の前にヘヤチラ氏が現われ

「じゃあヒゲさん いっちょブチ嘯ましてやりましょか」

と、頼もしい笑みを浮かべながら両手で僕の肩を掴み、グイッ！と押してきた。

何が何だかわからないまま後ずさりする僕。

さつき走り去った男女の向かい合わせヴァージョンだ。

徐々にスピードを上げながら練習中のバスケット部員たちの中に突っ込む我々。

そこで僕は咄嗟にあるアイディアを思い付き、それを実行した。

ヘヤチラ氏を巴投げしたのだ。

もしこれがキレイに決まれば、あの太極拳女も大満足だろう。

しかし、右足を天高く上げ、仰向けになった僕が振り向きざま目にしたのは、

投げ飛ばされたはずのヘヤチラ氏が、何事もなかったようにフェンスの穴から走り去る姿であった。

という二本立ての夢を見た。

2015年7月6日

懐かしいなあ……

小泉今日子だっけ？

中森明菜だっけ？

作曲はたしか高見沢だったよな……

左肘を背もたれに置いて振り向き

天井のBOSEを見上げながら

僕はそんな事を考えていた。

ログハウスの屋根裏のような薄暗いレストランだった。

あっ！

これはデジャヴだっ！

突然気づいた。

正面に向き直すと案の定、テーブルの向かいに二十歳ぐらいの女性が座っていた。

僕はもうすぐこの子から別れ話を切り出される。

そして僕らは別れる事になるのだ。

咄嗟に右手を伸ばし、彼女の左手を握った。

浅黒くて細い腕だった。

僕は必死にシナリオを変えようとしていた。

臭っ！

あまりの匂いに飛び起きた。

強烈なオナラか？

下手するとウンコを漏らしたのかも……

慌てて辺りを嗅ぎまわったが何も匂わない。

どうやら夢だったらしい。

2015年7月11日

終